

大分ゆふみ病院の看護について

看護師長 堀 千代

ホスピスというと、「死」＝「最後の場所」をイメージさせ近寄りがたいイメージがあるようです。実際患者さんや家族の方から、「ホスピスに行くにはまだ早いと思った」という言葉を聞きますし、医療関係者の方でも「ホスピスは最後に行くところ」と考えている人もいます。症状が緩和されれば自宅に帰ることもでき、ホスピスと自宅を行ったり来たりされている患者様もいます。実際入院してみると個室でゆっくり家のように生活できる環境に「早く来ればよかった」と言われる方がほとんどです。

このように、ホスピスは「特殊なところ」と思われているため、実際に働いている看護師の仕事も特別なことをしていると思われている方もいるかも知れません。しかし、実際は「当たり前のことを丁寧に行っている」だけで、一般病院の看護師の仕事と何一つ変わりはありません。

病棟は 2 交代制です。看護体制はプライマリーナーシングとチームアソシエイトで行っています。一人の患者様を一人の看護師（プライマリーナース）が入院から退院後まで担当させていただいています。入院当日にはプライマリーナースが担当し、快適に不安のない状況で一日目の夜が過ごせるように、入院患者さんだけに専念できるように配慮しています。病室の環境やベットマットを患者さんの状態に合わせて準備、また緊張して入院される患者さんや家族の気持ちも考え、プライマリーナースは病院の庭に咲いている花を選んで病室にウエルカムフラワーを準備しています。ホスピスに入院をすると決めても、診断から治療を行ってきた病院を離れて転院するということはとても辛い決断です。あるご家族は、車がゆふみ病院に近づくにつれ「ホスピスに入院させたくない、前の病院にもどって」と何度も何度も心の中で叫んでおられたそうです。それほど辛いお気持ちの中でゆふみ病院の玄関に到着した時、入院患者さんを待つプライマリーナースの笑顔が目に入り「ここはいいところかも、入院しても大丈夫」と思ったと話してくださいました。入院後も「本当にここにきてよかった」と入院当日の複雑な気持ちを振り返り、その後の関わりの中で安心して過ごされ感謝の言葉をいただきました。

入院後は、患者さんの苦痛を軽減することを第一の目標に多職種で関わっていきます。ご家族もケアの対象となりますので、体調や気がかりなことをお聞きしサポートしていきます。どのように過ごしたいのか、どう関わればよいのかプライマリーナースが、看護ケア計画表に、どの看護師が担当しても患者さんや家族の希望に添えるような関わりができるように記載しています。自分のことが自分で行えなくなり、日常生活の介助が必要になる方も多いため、細かく希望を取り入れながらケアを行っています。

残念ながら、亡くなられて退院される方に対しては、エンゼルケアを行っています。エンゼルケアは、入院中の患者さんに来る最後のケアであり、またグリーフケアにもつながるものであるため、患者さんや家族の思いを取り入れることができるよう入院中の関わりの中でお話を聴いています。家族と行うエンゼルケアは死別という悲しみだけでなく、

患者さんとの思い出を語りながら泣き笑いの空間となります。また温かい身体に触れる最後の貴重な時間として十分なお別れが出来る様に配慮しています。退院後もプライマリナースは、手紙や電話などご遺族となった家族のグリーフケアを行っています。患者さんのお別れは看護師にとっても辛いものです。退院後のカンファレンスを行い、患者さんや家族の思い出を語り、自分達も癒されるような時間を作っています。

患者さん、家族が安心して過ごせる環境を作るために、看護師は医師やその他病院の職員、ボランティアスタッフと協力しながらケアを行っています。